

# 人生を拓く

41

大城

信光さん(85)  
カチ子さん(79)

南町1丁目

富山県小津(現魚津市地域の旧名称)出身の入植3代目。父、宗平さん(昭和8年、2歳の時に早逝)、母キヨさん(同14年、8歳の時に早逝)の6人兄弟の末っ子として育ちました。

両親を早くに失った一家は、母親の姉妹、祖母が料理、洗濯、縫い物を手伝ってくれたおかげで生活を支えることが出来たそうです。

「孫ばあさんに育てられたから『カアちゃん』でないんだ。『バァバ、バァバ』ってね。」

学校から帰ると薪を切り、かまどに火を起こして飯炊きするのが日課。掃除、洗濯など家の中の仕事は末っ子の信光さんの担当だったそうです。

苦勞続きの中で、28歳の時、隣家同土で家族ぐるみの付き合いをしていた古高家の末っ子、カチ子さん(当時22歳)と結婚。3年後に西2号6線に古い農家と田んぼ(2・5畝)を買って分家しました。

「先輩が3人も家に来てさ。『田んぼ買え』って言うもんでさ。買った以上はやらにゃならん。親はいないし、一番末っ子だから、全部自分でやったさ」と3年ほど夫婦で田んぼ仕事を続けました。古い家を壊して自分で新たに家も建て直したそうです。



自宅を建てた経験、森林組合で働いていた経験を生かして、信光さんはその後土建工として働き、田んぼ仕事はカチ子さん一人の双肩に。生まれたばかりの赤ん坊をあやす間もなく、毎日遅くまで働き詰めでした。

「分家だから見てやれるものがおらん。田んぼの中で、わらの上に亀の子敷いて寝かし付けてたよ。乾燥機の音聞こえるから、安心して寝てたんだね。今はそんなことしたら大変だ。かわいそうだったね。」

その長女は19歳で結婚し、孫は今や高校2年生。「『ばあちゃん、玄孫見るまで頑張んなよ』って言うてるからねえ。」

信光さんは49歳で一人親方として独立。68歳まで土建会社の下請けとして、良い時には雇い大工3人を抱えていました。倉庫、工場の基礎工事などを請け負ったそうです。「昔は重いものを持ち上げて、よく腰痛めたっしょ。一人で背負わんば良いのに一人で背負うから」。窓の外の新築住宅の工事を眺めては、職人気質で「昔とは設備が違う。でもおかしな屋根造って、谷間造って、あんな屋根で冬の雪積心配じゃないのかね」と気にかかるようです。

## 俳句

鳳仙花夕日に映えて燃え尽きる

向かい風ゆけゆけ負けるな赤とんぼ

あれもこれも野菊野菊と呼ぶんだね

棺閑ず仏は菊に包まれて

焼き枝豆あちちあちちと食いしん坊

恋文や父に花野の見えしとき

前菜は菊なますどうぞ召し上げれ

嫁ぐ朝笑みで見送る父の睨

枝豆のさやより落ちるひすい色

むきながらじゆるりあふれて水蜜桃

とうきびを握る男の齒の隙間

幸せかなんて枝豆食べながら

天高し校歌で締める甲子園

帰省子や帰る朝餉に言葉少な

菊人形纏ふはおのが光のみ

杉山りつ

こばやし 星来

横田則子

石澤清宏

三島智

若田郁

本田咲

佐々木りえ

斎藤夕桜

山内みゆ

由川真人

小林ろば

杉山 ひろのり

保科なほ

徳光吐苦

